

2013年度韓国政府日本教職員招へいプログラムに参加して

曾我雄司

【抄録】 昨年8月、ACCUの国際交流事業のひとつである韓国政府日本教職員招へいプログラムに参加する機会を得た。ESD、国際交流様々な側面と関わりのあるプログラムを通じて、附属学校の今後の国際化推進につながるヒントを得た。また韓国の教育事情を現場において学ぶことで、現在の日本の教育において改善すべきところなどについて考えることができた。

【キーワード】 国際交流 韓国の教育事情 韓国の歴史遺産 ESD（持続発展教育） EIU（国際理解教育）

1. プログラムの概要について

まず本プログラムの沿革について。これは『国際連合大学2012-2013年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書』（以下、「実施報告書」とする）の該当箇所を、そのまま転載させていただく。

「韓国政府日本教職員招へいプログラムは、2000年度から実施されている韓国教職員招へいプログラムと対応するプログラムで、2003年から日本の教職員を韓国へ派遣してきた。これらの交流事業の成果が韓国政府に評価され、2005年からは参加人数を倍増し、韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして実施されることとなった。2007年には、文龍麟（ムン・ヨンリン）元韓国教育部長官からの招請により、中曽根弘文元文部大臣を団長として日本教職員26名が韓国を訪問した。2012年までにのべ369人の教職員を韓国に派遣し、両国の教職員の交流を深め、日韓両国間の相互理解と促進に貢献してきた」（実施報告書p.4）

次にプログラムの日程について。7月のオリエンテーションののち、8月22日（木）～29日（木）の8日間にわたり、ソウルおよび地方都市の教育施設・機関などを訪問視察した。2013年度プログラムは50名の参加者であったが、AとB二つのグループに分かれて、それぞれ別の学校、別の地域（Aは忠清北道、Bは江原道）を訪問した。筆者はBグループであった。以下、日程の概要を記す（忠清北道・Aグループの記録を知りたい方は、実施報告書をご覧ください）。

日にち	プログラム
8/22（木）	仁川国際空港到着 → ソウルへ オリエンテーション 開会式・歓迎晩餐会
8/23（金）	保聖女子中学校訪問
8/24（土）	韓国ESD及びASPnetについて 韓国の教育講義 韓日教師ソウル探訪
8/25（日）	（江原道・春川市へ移動） 韓国DMZ平和生命園訪問 春川市・ホームビジット

8/26（月）	江原道教育庁訪問 春川教育大学附設初等学校訪問 清平寺訪問 歓迎晩餐会 （原州市へ移動）
8/27（火）	原州女子高等学校訪問 グループプログラムレビュー会議 雉岳山国立公園訪問
8/28（水）	（仁川市へ移動） 報告会・閉会式
8/29（木）	関西国際空港到着

2. 参加にあたって課題としたことなど

プログラム応募当初、課題としていたのは、韓国における生徒会活動や生徒同士の国際的な交流を通じて人材育成を図るためのヒントを見つけること、専門教科である歴史の分野に反映すべく現地での知見や経験を深めることであった。

また総合人間科、とりわけ中学2年生と高校1年生の「生命と環境」では、ESD（持続発展教育）やEIU（国際理解教育）に関わる個人テーマで研究を進める生徒が少なくない。ゆえにESDに対して、韓国ではどのような取組が行われているかを視察し、本校に取り入れられる部分はないかというのも課題であった。附属学校は、2010年からユネスコスクールに指定されており、海外からの視察・訪問を受け入れる機会が多い。訪問する側を体験することで、フィードバックできることがあるのではないかと考えた。

一方、慰安婦問題などがこじれ日韓関係は非常に冷え込んでおり、険悪な状況の中での訪韓は正直怖いものであった。専門教科が歴史ということもあって、歴史認識を中心とした日韓関係の悪化はつねに意識せざるを得なかった。韓国の人は歴史問題を中心に日本に何らかの敵意を持っており、それはぬぐい難いのだと、ある意味おびえながらこのプログラムに参加したのも事実である。

このプログラムの最大の特徴は、現地で日本文化に関する授業を受け持つ機会があることである。オリエンテーションでその分担が決まったが、言葉も通じない

(英語でのスピーチも自信がない)自分がどのような授業をしたらよいのか、「日本文化」の何を取り上げればよいのか、そして上述の歴史問題にどう向きあわなくてはいけないのか、軽いパニック状態に陥った。

オリエンテーションの後、ACCUからのアナウンス、韓国人通訳との授業の打合せ、ホームビジットで一緒に先生との相談などをするうちに、出立までの1か月は過ぎていった。

3. プログラムを通じて学んだこと、体験したこと

(1)韓国の教育事情

学校訪問の際の学校紹介や意見交換会、また教育開発院のグローバル教育研究本部長の講義などから、韓国の教育事情について知ることができた。

韓国で大学受験が熾烈化していることは、すでに周知のことと思われる。訪問した学校では、放課後学習の時間がみっちり組まれている。中学・高校では、自習の生徒が夜22時まで残って勉強する。その残留率は5割以上である。土曜日も自習をしており、生徒は保護者に車で迎えに来てもらう。睡眠時間は5時間程度とも言われている。具体的な時間割の例をあげると、訪問した原州女子高校では、

8:10 = 登校

8:30 ~ 16:50 = 授業 (100分×4コマ。昼休み80分)

17:10 ~ 22:00 = 放課後学習

(50分×1コマ。夕食70分。100分×2コマ)

となっている。

この過熱は、短期間で高水準の公教育体制の構築を可能とし、PISAでも最高水準の評価を得ることを可能としたが、国際教育の比較分析において幸福指数は最下位水準というマイナス面ももたらした。ゆえに朴槿恵政権となってからは、「幸せ学習」がテーマとして掲げられ、「自由学期制」を導入することが進められているという。これは、中学2年の1つの学期を教科教育ではなく、探求学習の期間とするという試みで、2013年度からパイロットケースで開始。2016年以降は全面採用を計画しているとのことである。他にも無償給食、教育費軽減策など、均等な教育機会保障のための支援政策を行っている。「自由学期制」については、訪問した日本の教員からは日本のゆとり教育の二の舞ではないかと批判が多かったこと、また別の機会にこのことについて韓国人留学生と話したところ、現実性のないものと冷やかな反応だったことを付け加えておく。

教員に対するサポートは比較的充実しているようであり、育児休暇の制度の整備や、教員が授業に専念できるように一般業務を行政司が行う制度の確立など、工夫がされているようである。このあたりは、ぜひとも日本は見習ってほしい。

ちなみに韓国の高校には日本語科が置かれている学校

があり、春川でホームビジットでお伺いしたのは日本語科の先生のお宅であった。ただ彼の話によると、現在韓国の学生は、日本語の勉強から中国語の勉強にシフトしているとのことである。ソウル滞在中も中国人観光客を多く見かけ、中国語の案内も多く目にしたことを思い出した。

(2)訪問校の様子(概要・施設・ESDへの取り組みなど)

1) 保聖女子中学校(私立・ユネスコスクール)

学生数519人、学級数18組、教職員数42人。教室には大型の液晶テレビ、プロジェクターつりさげ&スクリーン。スマートフォンの保管庫が教室内にあったことが印象的であった。食堂は2Fだて。売店ではお菓子も売っている。生徒のリフレッシュルームもある。

ESDは、1カ月1回の地域への奉仕活動、授業1時間の消灯運動など。生徒会中心。

2) 春川教育大学附設初等学校(国立・ユネスコスクール)

学生数475人、学級数19組、教職員数38人。教室の黒板はスライド式で、韓国の地図・五線譜などを引き出せる。図書館は独立の一棟。滑り台などもあり、利用する小学生への配慮が随所に感じられた。英語教室などあり。放送室はスタジオも充実しており、お昼の放送の収録風景を拝見させていただいた。

最初に児童による訪問歓迎会があり、踊りや楽器演奏などを児童たちが入れかわり立ちかわり披露してくれたが、非常にレベルが高かった。日本語による挨拶もしっかりとしてくれた。

ESDは多文化理解や人権教育、環境教育などを中心に取り組んでいるとのことであった。

3) 原州女子高等学校(私立)

学生数1242人、学級数33組、教職員数69人。教室によっては電子黒板もあり。PCを使用している授業を展開している先生も多くいた。訪問したのは新築1カ月の校舎であり、ホールや図書室、各種教室の設備も充実していたが、まだ完全に使いこなしていないとのことであった。

(3)原州女子高校での授業

上記3つの訪問校のうち、私が日本文化紹介の授業を担当したのは原州女子高等学校であった。

いろいろと悩んだが、日常の授業で画像や動画を見せたり、実物教材を提示したりなどしているので、そのラインで構成した。韓国はICT設備が充実しており、授業を行った教室は電子黒板が備えてあった。

写真や浮世絵などの画像資料を提示しつつ、現在の名古屋の街の紹介、日本の歴史や現在の若者文化について話し、

最後は生徒の代表に浴衣の着付けを体験させた。

日本でできることが韓国では通じるかというのも課題であった。結果としては大成功であったと思う。授業を受けた生徒たち本来の反応の良さもあるが、現在の名古屋の街の写真は生徒の興味を引いたし、実際に浴衣を着てみることはとても楽しかったようである。「楽しい」を通じながら、理解をさらに奥深いところへ持っていければよいというのがいつもの自分の授業である。今回、理解を深める段階まで進めたとは思えないが、「楽しい」体験を生徒たちにしてもらうことで日本文化に興味をもらうことはできたのではないかと思う。

授業後、感じたのは通訳の重要性であった。恥ずかしながら最初のうち、通訳は言葉に向こうの言葉に直してくれさえすれば十分だと思込んでいた。だから事前はともかく、旅行の間も何度も打ち合わせを要求されるのが最初のうちは不満であった。しかし何度も話をしていくうちに、通訳は両国の文化の共通点と差異点とを理解しなくてはできないということに気づかされた。同じことでも韓国と日本で見方・考え方・とらえ方が違うことが対話の中で明らかになり、これは言わなくてもいいこと、これは補わなくてはわからないこと、それが少しずつ見えてきたことが非常に面白かった。この仕事を続けていると、えてして「みんなわかっているはず」を前提に進めてしまう。それはどうなのかという危険性にあらためて気づかされた。その意味でも貴重な機会であった。

4、プログラムを終えて考えたこと、今振り返って思うこと

2でふれた課題については、帰国後ACCUに提出した報告書に書いたので、以下それを参考にまとめた。

韓国における生徒会活動や生徒同士の国際的な交流を通じて人材育成を図るためのヒントを見つけることについて。最初の訪問校である保聖女子中学校においてみるのができた。会場での接待や校内の誘導などをしてくれたのは生徒会のメンバーであり、また同校内におけるESD活動の中核となっていたのは生徒会であった。月1回の地域社会での奉仕活動などESD活動を主導する一方で、どの程度自治的なことができるのだろうか、そもそも組織としてはどうなっているのかなど疑問があったため、午後の懇談会では質問させていただいた。選挙制度については日本と同様であるが、生活指導について自分たちが裁判を行う模擬自治法廷を開くなど、生徒たちがかなり強い意識を持って活動に参加していることに驚かされた。とりわけ印象的だったのは、昼食時に生徒会のメンバーがメッセージボードを持って食堂に立ち、ESD活動についてアピールをしている姿であった。教師の強制によらず活動を自発的に進めていく姿勢は日本でも取り入れていきたいものである。

専門教科である歴史の分野に反映すべく現地での知見や経験を深めることについて。プログラム中、ソウルの先生方の案内でソウル市内をめぐる機会があった。景福宮など文化遺産の見学とレクチャーを受けることで得られた知見を授業へフィードバックしたい。また空き時間を見つけてソウル・タプコル(パゴタ)公園に行った。ここは1919年の三・一独立運動の勃発の地である。もう少し愛国的な雰囲気的空間かと思っておそろおそろ訪れたが、至って普通の公園であったことに肩透かしを食った気分になった。目標としていたレリーフは奥の方にひっそりとあった。ひととおり写真を撮ったので、授業で活用したい。

ESDについて韓国ではどのような取組が行われているかを視察し、本校に取り入れられる部分を探すことについて。韓国で行われている英語村・米軍への英語キャンプなど、英語を使わざるをえない場に生徒を放り込んで能力を高めるというのは一案だと思った。

またプログラムが進むにつれて、民間のレベルでは日韓の歴史問題を重く受け止めつつも、いかに良好な交流を続けられないか、我々と同様に韓国の人々も模索していることがわかってきた。当たり前と言ってしまうまでもそれまでだが、韓国の生徒たちも日本の生徒たちと同様に学び遊び生活しているのだということもわかった。礼儀を尽くしたうえで、ちゃんとじっくりと対話することが可能であり、いわゆる「ネトウヨ」などが乱発する安易な意見や情報に流されないで日韓が向き合うことが必要なことを、日本でも伝えたいと思った。

他に今回の日本文化紹介の授業のような企画、つまり訪問校で少しでもよいから授業やお話をしてもらうことで、生徒の多文化理解を深めるというのは意味のあることだと感じた。来訪される先生にとっても、ただ見るだけではなく授業を試みることは、良い経験となると思う。

そして今、約1年を経て紀要として経験をまとめるべく振り返ると、国際理解を進めるためには、ある程度固定的な交流相手を見つけること、その間で定期的・継続的・相互的な人事交流が必要であることを感じる。現在、附属学校は、モンゴル、ニューヨーク、ノースカロライナとの交流を軌道にのせている。しかしこれ以上交流の機会を増やすのであれば、資金的・人的等様々な余力が必要である。教員を現地に派遣して研修させるとすれば、その教員の授業・校務分掌などの仕事をサポート・フォロー・代替する必要がある。そのあたりの余力がない限り、拡大は難しい。かなり大規模な支援体制ができない限り、現状ではこれ以上の拡大は無理だと思われる。

一方、大学附属というメリットを生かすならば、通訳・チューターとしての外国人留学生の積極的な活用が

望まれる。ギャランティー・交通費などの経費面、また日本語理解・日本理解の実践的研修の場を与えるという実益面を考えれば、有効な方策と思われる。韓国プログラムでは第一通訳は専門職であったが、その補佐として韓国の外国語大学の学生を起用し、仕事をさせつつキャリアを積ませていた。私がお世話になった通訳の学生も、この機会を活用しつつ、その後日本の大学に留学している。附属学校の国際化と大学留学生の有益な研修機会は、歩を共にすることが可能であることを改めてここで確認しておきたい。

韓国での体験を改めて文章にしてみると、1年たった今でも気持ちが昂るのを感じる。このプログラムに参加する機会が与えられたことに感謝しつつ、擱筆したい。

【参考文献】

『国際連合大学2012-2013年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書』
(http://www.accu.or.jp/jp/activity/person/data/2013_VisitKorea.pdf)

2011年度、2012年度の韓国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書についても、ACCUのホームページ上にpdf形式でアップロードされているので見ることができる。

5. 写真

1) 保聖女子中学校の様子



校舎外観



教室のスマホ収納ボックス



職員室



English Room

2) 春川教育大学附設小学校



校舎外観



歓迎式典でのだしもの



日本文化紹介の授業の様子



図書室のすべり台

3) 原州女子高等学校



校舎外観



音楽の授業の様子



日本文化紹介の授業の様子